

韓国における「結婚移住女性」のスティグマの自覚と対処方法

具 美善（一橋大学大学院 言語社会研究科）

1. 研究背景と目的

本研究の目的は、韓国において「結婚移住女性たち」がいかにして自分たちに付与されたスティグマを自覚し、そのスティグマに対してどのように対処しているかを明らかにすることである。

スティグマとは元来、犯罪者や奴隷に押された焼印、キリスト教でいう聖痕という意味をもっていた。社会的には「对人的状況において正常からは逸脱したとみなされ、他人の蔑視と不信を買うような欠点・短所・ハンディキャップなどの属性」（社会学小辞典2005）である。ゴフマンはスティグマの特徴として、「それさえなければ問題なく通常の社会的交渉で受け容れられるはずの個人に出会う者の注意を否応なく惹いて顔をそむけさせ、彼にある他の好ましい属性を無視させるようなところがあるのだ」（1963=2003:19）と指摘し、三つの異なった種類のスティグマについて述べる。①肉体のもつさまざまな醜悪さ、②精神異常、投獄、麻薬常用、アルコール依存症、同性愛、失業、自企図、過激な政治運動などの記録から推測される個人の性格上の様々の欠点、③人種、民族、宗教などという集団に帰属されるスティグマである（1963=2003:18）。

韓国では、韓国人男性と結婚し韓国に移住した途上国出身女性を、主に「結婚移住女性」、「結婚移民者」、「移住女性」などの言葉で称するが、こうした言葉には、「韓国人男性との結婚を通じて韓国に移住してきた女性」という意味だけではなく、形容詞的な「売買婚によって移住してきた女性」という意味ももっている。そのため、「劣等な女性」、「経済的な理由で愛情のない結婚をせざるを得なかった可愛そうな女性」、「愛情のない結婚をただけにいつ家族を棄て逃げてもおかしくない危険な女性」として見られている。こうした「結婚移住女性」に対するステレオタイプ化された見方によって、彼女たちは人間としての価値を貶められ、傷つけられるのである。

しかし、スティグマの所有者は、自分自身に付与されたスティグマをそのまま持ち込むのではなく、状況を管理・操作するためにそれぞれに固有の仕方で努力が払われるとされる。ゴフマンが提示する体表的な印象管理の戦略には、「印象操作」、「補償努力」、「開き直り」、「価値剥奪」がある（上野 2005：21-23）。上野によると「印象操作」とは、「なりすまし」という隠蔽が含まれる社会的アイデンティティの加工や擬装耕作で、「補償努力」とは、一つの社会的アイデンティティにおけるマイナスを、他の社会的アイデンティティにおいて補償する戦略である。そして「開き直り」は、「ブラック・イズ・ビューティフル」のようにカテゴリーの定義を受け容れたうえでそのまま価値を反転する戦略で、「価値剥奪」とは、以上のすべての戦略が失敗したあと、自らを変えないまま、より相対的に弱者である社会的カテゴリーの人びとの価値を奪うことによって自らの社会的アイデンティティを相対的に高める「差別」化戦略である。

本研究では、このようなゴフマンのスティグマ論を参考にしながら、韓国における「結婚移住女性」当事者がどのような状況でスティグマを自覚し、いかに対処するかを明らかにする。

2. 研究方法

本研究では、2013年8月から12月にかけて、韓国の忠清南道ノンサン市に居住するベトナム出身9名、フィリピン出身8名、中国出身4名、モンゴル出身3名、カンボジア出身3名、ウズベキスタン1名、計28名の「結婚移住女性たち」にインタビューを行い、分析を行った。インタビューはライフストーリー・インタビューガイドに沿って行われた（桜井・小

林 2005)。分析は、①インタビューの録音データから逐語記録を作成②意味内容を変えないことを前提に補足・修正等の整理を加え、ライフストーリーを作成、③ライフストーリーから、スティグマを自覚する過程や対処方法に関する語りを注意深く拾い上げ、分析を行った。

3. スティグマの自覚過程

インタビューの分析結果、彼女たちが自分に付与されたスティグマを自覚するようになるパターンは主に四つに分類できる。①家族や親族など身近な人による言葉や態度からの自覚、②市場や仕事先、子どもの保護者会など、社会参加をする中での自覚、③同じ立場にいる他の「結婚移住女性」の状況からの自覚、④メディアーを通じての自覚、である。

4. スティグマの対処方法

1) パッシング：ゴフマンは、「スティグマのある人」と称される個人を「既に信頼を失った者」と、「信頼を失う事情のある者」に分ける。前者は、他者が出会った瞬間にその当該者は「スティグマのある人」とであると認識され得るような個人である。後者は、他者が出会った瞬間にはその当該者は「スティグマのある人」とであると判断することが不可能である個人である。インタビューでは、自分からカミングアウトしないかぎり外見からは「外国人」であることがわからない中国やモンゴル出身女性にこの手法がよく見られた。特に中国の朝鮮族女性たちは外見からも言語能力からも「韓国人になりすます」ことができるので、有用な対処方法とされていた。

2) 補償努力：インタビューから多くの「結婚移住女性たち」が自分自身に付与されたスティグマを中和し補うために何だかの努力をしていることが窺えた。例えば、韓国において威信のある言語である英語や中国語を生かした仕事をすることで自尊心の維持や印象管理をしたり、孤児院や障害者施設で定期的にボランティア活動をすることでイメージ転換を模索していた。

3) 開き直り：自分自身に付与されたスティグマを否定せずに受け入れながら、しかし、自分たちは「結婚適齢期を過ぎた農村の男性を救った救世主」、「韓国女性が捨てた田舎に生命力を与える存在」と意味づけるケースが見られた。

4) 差別化戦略：インタビュー調査で見られるケースは、より相対的に弱者である社会的カテゴリーの人びとの価値を奪うことによって自らの社会的アイデンティティを相対的に高める「差別」化戦略ではなく、同じ「結婚移住女性」というカテゴリー中での「差別化」戦略が見られた。例えば、比較的に高学力で英語ができるフィリピン出身女性がベトナムやカンボジア女性と線を引くことである。また同じ出身国の中でも自分はブローカーを通じての結婚ではないことや、出身国にいる家族に送金をしていないことをアピールし、差別化戦略を取っていることが窺えた。

5. まとめと考察

韓国社会は韓国人男性と結婚し韓国に移住してきた途上国出身女性たちを「結婚移住女性」「結婚移民者」、「移住女性」などの言葉でカテゴライズし、「劣等な」、「かわいそうな」、「危険な」などのスティグマを付与している。そして、当事者たちは日常生活の中で自分自身に課せられたスティグマを自覚するようになる。

しかし、自己に付与されたスティグマをそのまま持ち込むことで、社会によってコントロールされるだけではなく多様な戦略の可能性を示し、そのことによって、必ずしも社会的な力に屈するだけではない存在であることを示している。

6. 引用文献

上野千鶴子(編)、2005『脱アイデンティティ』勁草書房。

Goffman, Erving, 1963, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*. Prentice-Hall, Inc.= 2003

石黒毅訳『スティグマの社会学－傷つけられたアイデンティティ』せりか書房

浜島明・竹内郁郎・石川晃弘(編)、2005『社会学小辞典・新版増補版』有斐閣

桜井厚・小林多寿子(編)、2005『ライフストーリー・インタビュー：質的研究入門』せりか書房